ささ じま ひで あき
笹 島 秀 晃

学位の種類	博 士（文 学）
学位記番号	文博第 372 号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 人間科学専攻
学位論文題目	**「都市の美学」の条件** **1970年代以降の都市をめぐる「生産」・「経験」・「権力」についての都市社会学的考察**
論文審査委員	（主査） 教 授 吉 原 直 樹　教 授 正 村 俊 之 教 授 佐 藤 嘉 倫 准教授 永 井 彰 准教授 下 夷 美 幸

論 文 内 容 の 要 旨

先行研究の問題点、及び本稿の目的

本稿の目的は、1970年代以降、欧米諸都市の都市開発において、ミュージアムの建設やアート・フェスティバルの開催など都市空間における審美的要素に関心があつまる事態を「都市の美学」と表現し、その社会構造的な背景を都市社会学理論の学説研究をとおして明らかにすることである。

1970年以降、欧米の諸都市においては、衰退した港湾部におけるウォーター・フロント開発やインナー・シティにおけるジェントリフィケーションという形で、アートをはじめとした文化的意匠が都市開発における地域活性化のための手段として拡大していった。アメリカ・ボルチモアのハーバー・プレイス、ロンドンのドックランド、ニューヨークのSoHo、スペインのビルバオにおいて進展した都市開発は、その代表的事例である。

アートなどの文化的意匠を利用した都市開発の増加は、近年都市社会学、経済地理学、文化経済学領域において、“Cities use culture as an economic base”（Zukin 1995）、“The city as an entertainment machine”（Clark 2004）と様々な呼称で議論されてきた。そのなかでもデヴィット・ハーヴェイ（Harvey 1989, 1990）は、先行研究の知見を集約する、基礎的な論点を提示してきた。

ハーヴェイは、上記の研究動向において言及されることがもっとも多い著作の一つである、1990年の著作『ポストモダニティの条件』のなかで、次のように述べている。

1960年代後半に始まり、1973年に頂点に達した過剰蓄積の危機は、まさにそのような結果をもたらしたのである。時間と空間の経験が変容し、科学的判断と道徳的判断との結びつきへの確信が崩壊することで、社会的関心、知的関心の最も重要な焦点が倫理 ethics から美学 aesthetics へと変わり、イメージが物語を支配し、はかなさと断片化が永遠の真理と統合された政治よりも上位に立ち、説明は、物質的、政治－経済的な基盤の領域においてではなく、自律的な文化的、政治的な諸実践を考察することによってなされるようになったのである。(Harvey 1990: 327-8=1999: 424)

ここで重要なのは、「社会的関心、知的関心の最も重要な焦点が倫理から美学へと変わり、イメージが物語を支配」する、という指摘である。ハーヴェイは、この「倫理」から「美学」への移行を、1973年を分水嶺とするフォーディズム・ケインズ主義的な都市経営体制からフレキシブルな蓄積体制・ネオリベラルな都市経営体制への変遷という、都市経営における経済的な変動から説明する。

戦後の欧米諸都市では、フォーディズムに代表される大量生産・大量消費の繁栄に支えられ、ケインズ主義に代表される再分配制度を中心とした都市計画が進められた。マニュエル・カステルを中心とした新都市社会学派が「集合的消費」の問題として指摘したように、都市における住宅、病院、学校など、社会的インフラの供給を主軸とした福祉国家に包摂される都市経営体制である。都市における「倫理」とは、こうした状況を意味している。

しかし、1973年には、オイルショックにともなう深刻なスタグフレーションが発生し、それによって戦後の経済体制の終焉が決定づけられた。経済の停滞と戦後のフォーディズム的体制といった生産基盤の衰退、自治体の財政破綻のなかで、欧米諸国経済は、脱工業化・国際的な分業体制・金融経済によって構成されるフレキシブルな蓄積体制へと移行した。また、都市の経済基盤が壊滅的な打撃をうけたことによって、投機的な都市開発プロジェクトを中心とした都市経営手法が増えていった。都市は、再分配というよりも外遊する資本をいかに効果的に獲得するかによって、成長が左右されるようになった。それゆえに、自治体は、1970年代初頭以降、外遊資本を獲得する目的で、誘引のきっかけとなる様々な事業に着手する。「美学」的要素への着眼もその一つである。

ハーヴェイは、ここで「美学」的と呼ばれる現象の一端を、具体的には次のように示している。

ジェントリフィケーションや文化上の革新、さらには（ポストモダン様式の建築や都市デザインへの転換を含む）都市の物的環境のグレードアップや（スポーツスタジアムやコンヴェンションセンターおよび大規模小売店舗、マリーナやエスニック・レストラン等の）消費者のためのアトラクション、（都市的スペクタクルが一時的ないし永続的に組織化された）娯楽などのすべてが、都市の再興を図る上で有力な戦略的意味を帯びるようになってきたのだ。……また従って、祭典や文化的イベントも同様に投資活動の焦点となる。(Harvey 1989: 9 =1997: 43)

ここにおいては、ウォーター・フロント開発、インナー・シティのジェントリフィケーション、諸種のイベントなどが「美学」という言葉で指摘され、単純に近代的な美や、学問領域としての「美学」が意味されていないことは確かであろう。むしろ、消費社会における広範な文化的現象に開かれた事態を、美学 aesthetics という言葉で意味している。

本稿では、都市経営における文化的意匠の戦略的利用の都市的背景を、ハーヴェイの用語法にならいつつ「都市の美学」という言葉で理解する。また、先に述べたミュージアムやギャラリー、アート・イベントを利用した都市開発の興隆の社会背景として、1973年を境界とする経済の構造転換を指摘する

ハーヴェイの認識を基本的には支持する。すなわち、1970年代以降の「都市の美学」を、外遊資本を誘引する機会としての文化的消費の場の構築と見なし、その審美的特徴を、商品の流通や場所のなかで現れるスペクタクルとして捉える知見である。

しかし、ハーヴェイの研究における「都市の美学」化に対する分析は、二つの点で不十分な点があった。一つは、ハーヴェイが、1970年代初頭以降の「都市の美学」化を推し進めた要因として、経済的変動のみに着目しそれ以外の社会的要因については目を向けていない点である。もう一つは、一点目に関わるものであるが、「都市の美学」の社会的な位置づけを説明する際、ハーヴェイは「資本獲得のため」という経済的な位相しか記述していない点である。ニューヨーク・SoHoなどの事例を考えてみても、経済的要因のみに着目して説明する枠組みが不十分であることは明らかである。たしかに、1960年代以降深刻化するマンハッタンの服飾産業の空洞化が、産業の脱工業化を推し進める主要な契機になったが、その他にもSoHoの工場跡に不法入居したアーティストなどによるオルタナティブなムーブメント、1960年代以降加熱する公民権運動など、文化・政治的背景の多様な背景のなかで、SoHoのジェントリフィケーションは進展していた。

本稿は、ハーヴェイが検討した「都市の美学」の問題を、より多層的な観点から議論しなおすことで、1970年代以降の都市開発における構造的要因をより精緻に解明することを目的とする。またその際、第二次大戦後の都市変動を分析した都市社会学理論のなかで、「都市の美学」に関連する論点を分析した学説を検討することで、確かな理論的基盤の構築をめざすものである。

本稿の構成、および各章の要約

本稿では、ハーヴェイによってなされた経済的背景に着眼した「都市の美学」化への説明を相対化するために、1970年代以降の都市における「生産」、「経験」「権力」という三つの社会領域に着目し、それぞれの問題を集中的に検討した都市社会学者の学説の検討を行う。

「生産」、「経験」、「権力」とは、マニュエル・カステルによって提起された、都市変動において主要な革新の舞台となりうる都市空間の領域を意味する。「生産」とは、利潤の増加をめざす資本をめぐる関係性の領域、「経験」とは、アイデンティティなどの存在の基盤をめぐる関係性の領域、「権力」とは、国家による支配と秩序をめざす関係性の領域である。資本の観点から「都市の美学」化を分析したハーヴェイの視点は、カステルが指摘するところの、「生産」領域に着目した都市変動論と位置づけることが可能である。したがって、「生産」、「経験」、「権力」領域に着目していくこと試みは、「生産」領域のみに注目していたハーヴェイの理論を相対化し、新たに「経験」、「権力」という視座を「都市の美学」の論点にもたらすことになる。このことによって、ハーヴェイの知見では明らかにできなかった、「都市の美学」の多層的な位相を明らかにすることが可能になる。本稿では、ハーヴェイの「都市の美学」に対する都市認識を、カステルの都市変動論の知見を援用することで、批判的に乗り越えていく。

本稿における主要な議論は、五つの章において検討される。第1章は、本稿における全体的な理論的枠組みである。「生産」、「経験」、「権力」の準拠枠を精緻化するために、カステルの都市変動論を検討する。第2章～第4章は、「生産」、「経験」、「権力」の論点の検討を、それぞれの論点を主題的に検討している都市社会学者の理論を学説史的に検討することで行う。第2章においては、1970年代以降の都市の「生産」を検討した理論家としてのデヴィッド・ハーヴェイを取り上げ、第3章ではマニュエル・カステル、第4章は、ミシェル・フーコーとリチャード・セネットを取り上げる。第5章は、「都市の美学」を構成する「生産」、「経験」、「権力」の領域が、現代の都市空間においていかなる収斂を見せているのかを検討するために、文化的活動の推進による都市再生手法として近年注目されている「創造都

市」を検討する。以下、各章ごとの議論の概略を紹介する。

第１章 「都市の美学」のスペクトル：マニュエル・カステルの都市変動論を手掛かりに

第１章では、第一に、本稿の中心的な概念枠組みとなる「生産」、「経験」、「権力」の妥当性を、マニュエル・カステルの都市変動論を検討することによって提示し、第二に、「生産」、「経験」、「権力」の準拠枠が「都市の美学」をめぐる経験的事例において具体的にいかなる含意をもつものであるかを、1970年代以降のニューヨーク・マンハッタンの変化を参照することによって明らかにする。カステルの都市変動論の検討においては、1983年の『都市とグラスルーツ』を対象とし、カステルの師であるアラン・トゥレーヌの「行為の社会学」との関係性のなかでテクストを再構成して吟味する。こうした検討を踏まえ、次に示すような「都市の美学」をめぐる都市空間の変化があることを理論的に示した。

「生産」においては、資本の蓄積をめぐって「交換価値」的な関係と「使用価値」的な関係性の対立のなかで、都市空間がより資本の蓄積の合理的な空間として編成されていく。都市空間の「生産」の領域では、社会的共同消費手段をめぐるコンフリクトとして争点化する。「経験」の領域においては、メディア・コミュニケーションの進展と存在における固有性の感覚の希薄化によって特徴づけられる。電気・電子メディアによって助長された均質な都市空間パターンは、都市形態における一つの要因となったが、他方で均質化に対抗するオルタナティブの力として、より地域的固有性を要求するコンフリクトを作りだした。「権力」においては、法や規範を中心とした権力から、環境型の権力への変化である。1970年代の都市の危機以降、犯罪の増加、社会の流動性が増加するが、そこにおいて権力がもとめる秩序の構成は、法によるサンクションに加え、無秩序を事前に取り締まる方向へと、すなわち犯罪が起こりうる条件を縮減していこうとする傾向が現れる。それが環境的無秩序の縮減という傾向をもたらした。

1970年代以降の「都市の美学」は、「生産」における資本によるスペクタクル、「経験」における均質化とオルタナティブのジレンマ、「権力」における環境型秩序、という三つの特徴によって多層的に成り立つことが示される。

第２章　資本蓄積と都市のスペクタクル：ポストモダニズムの条件

第２章では、本稿の着想の源でもあり批判の対象でもある、「都市の美学」における経済的な説明について、すなわち「生産」の観点に着目したデヴィッド・ハーヴェイの「都市の美学」論を検討する。具体的には、「管理主義的都市から企業家主義的都市」、『ポストモダニティの条件』をメインテクストとし、ハーヴェイの学説史的な整理のなかで読解作業を進めていく。

ハーヴェイの著作を概観するならば、「科学・体系性」、「空間・変容」、「倫理・正義」の三つの問題意識のもと、マルクス主義的都市認識へと収斂するハーヴェイの姿勢が浮かび上がる。ハーヴェイは、資本蓄積と流通に資する都市空間の特性を明らかにしている。資本の観点からするならば、1973年以降の都市空間は、加速化する資本の流通のなかで、より貨幣的関係性が顕在化する空間として位置づけられる。貨幣の持つ、断片化作用、フェティシズムが都市空間において全面的に展開したものが「都市の美学」として現象化していることが示される。

第３章　情報化にあらがうアイデンティティの力：「都市の美学」のオルタナティブの位相

第３章では、「経験」の領域として、コンピュータなどの電子メディアの普及によって進展した社会の均質化と均質化に対向する集合的アイデンティティ動向を分析した、マニュエル・カステルの情報社会論を検討する。特に、1996年に初版、2000年以降に第２版が出版された情報時代三部作（『台頭する

ネットワーク社会 *The Rise of Network Society*』、『アイデンティティの力 *The Power of Identity*』、『ミレニアムの終焉 *End of Millennium*』をメインテクストとして、その主張を明らかにする。

カステルは、現代社会を「ネットワーク社会」として定義し、その誕生の要因を、1960年代から1970年代中頃までにおこった1）情報技術革命、2）資本主義と国家主義の危機、3）文化的社会運動の興隆にあることを指摘する。なかでも、もっとも大きな要因として議論される点が、情報技術革命である。

情報化によって作りだされる均質化の様相は、「ジェネリックシティ」といった均質的な「都市の美学」のイメージをまき散らす契機になり得るが、他方でアイデンティティに準拠したオルタナティブな都市空間の機制にもなりうる。カステルは、多発するアイデンティティをイッシューとした社会運動（アルカイーダなどの宗教原理主義、オウム真理教、アメリカの愛国主義運動）を検討しつつ、場所の記憶・固有性をめぐる気運が、いかに高まりつつあるかを指摘する。カステルの情報社会論を読み解くならば、1970年代以降の都市が、コミュニケーションの情報化による空間の均質化、また均質化に対向する場所性への執着という二元論的な構図で構成されることが明らかになった。

第4章　都市のリスクと視覚的秩序の醸成

第4章では、都市空間の管理化について、ミシェル・フーコー、リチャード・セネットらの知見を援用しながら、経験的な事例の検討も踏まえて検討する。特に、フーコーの『監獄の誕生』、セネットによる1970年の『無秩序の活用』をメインテクストとして議論を進めていく。近代からはじまる「権力のまなざし」による管理的な空間構成と、戦後の郊外化のなかで進展する都市空間のアノマリーを排除していく状況との交錯の問題である。

フーコーは、規律－訓練型の権力と生－権力の二つを指摘したわけだが、都市空間においてより重要なのは、規律－訓練型の権力である。フーコーによるならば、監視の空間として近代構築された学校や病院の編成ロジックは、パノプティコンというメタファーで説明されるように、近代の都市空間そのものを構成する要素となる。

他方、セネットが議論するのは、1970年代以降、特にアメリカ社会で進展する郊外化と、それによって進展する内向的な家族関係、コミュニティ関係である。戦後アメリカの郊外空間は、より親密な家族関係を求める心性を醸成し、人々を青年期の未熟なパーソナリティに押しとどめる。結果、社会における公共空間は、より親密な家族関係を生みだすことにつながるもの、単純で秩序だった空間として志向されるようになる。セネットが問題視したのは、特に1970年代以降のアメリカ都市が、「多様性」や「他者との出会い」といった生における無秩序性の契機となり得るものを忌避し、閉塞的な家族関係（凝集家族）に隠遁し、結果公共空間が、秩序だった純粋な空間として構成される過程だった。

フーコーが指摘する「まなざし」の観点から説明される権力と、1970年代以降郊外化によって進展する公共空間の無秩序を忌避する心性は、1980年代以降、都市空間の無秩序を限りなく縮減していこうとする、自治体と警察の動向を説明する。ジョージ・ケリングとキャサリン・コールズが提案した、都市空間の視覚的無秩序と治安の悪化を関連づける「割れ窓理論」はその典型例である。例えば、2000年以降の、警察、地方自治体、住民によって進められた神奈川県横浜市の特殊飲食店街の環境浄化の事例のように、都市空間は、権力による環境管理的な秩序を一つのモメントとして構成されている。

第5章　「都市の美学」をめぐる今日的様相：創造都市における「生産」・「経験」・「権力」の収斂

第5章では、1970年代以降進展する「都市の美学」化の今日的な展開として、文化活動を中軸に据えた都市再生モデルとして世界中に拡大している、創造都市を検討する。ここでは、おもに創造都市理論

が誕生する社会的背景と、中心的な論者の理論を検討することで、1970年代以降の「都市の美学」を構成する「生産」、「経験」、「権力」の位相が、現代社会においてどのように収斂、もしくは分離しているかを、明らかにする。

創造都市は、1990年代以降、ヨーロッパの自治体の都市再生手法として脚光を浴びてきた。具体的には、グラスゴー、バルセロナ、ロッテルダム、ボローニャ、リヨンなどの都市を指す。創造都市の施策内容は、1）芸術・伝統文化（遺産）の振興と固有の都市景観の実現、2）ハイテク産業、文化産業などの新興産業を中心とした産業クラスターによる都市経済の再生、3）自治体におけるNPOや企業との協同を中心とした行政パートナーシップの推進、などに集約される。

創造都市の系譜をたどると、古い工業都市や港湾都市で、かつての経済基盤が崩壊した後、新しい経済基盤を模索するなかで文化的戦略を打ち出した都市であることが明らかになる。また、伝統産業などの地域固有の資源や場所性への共通した関心が見て取れる。加えて、環境の構築には、管理的な諸力による警備など、権力的な空間構成も確認された。

結論的所見

近年の都市社会学、経済地理学領域の理論的知見を検討するならば、「都市の美学」の問題において、「生産」、「経験」、「権力」という、都市変動における三つの社会領域それぞれのなかで、都市変動に相関する変化があることが理論的知見として明らかになった。

第一の、「都市の美学」をめぐる社会変化についての問いに対しては、三つの社会領域におけるいくつかの分水嶺が、結論的所見として提示された。「生産」においては、1973年を一つの分水嶺とする、フォーディズム・ケインズ主義的な経済体制、管理主義的な都市経営体制から、フレキシブルな蓄積体制、企業家主義的な都市経営体制への移行である。「経験」においては、1950年代に本格化するテレビ放送などの電気メディア、1990年代以降爆発的に拡大するインターネットなどの電子メディアへの転換である。「権力」においては、近代からはじまる「権力のまなざし」による空間の機制のなかで、第二次大戦後以降拡大する郊外化とそれに相関する閉鎖的な家族関係やコミュニティの出現、また1970年代初頭以降の都市の危機のなかで増加する犯罪によって、法・サンクション的な秩序管理から、80年代以降増加する環境管理型の「権力」への移行である。

このように、ハーヴェイが指摘したような経済領域への着眼のみでは、1973年のみが「都市の美学」化の転換点とされていたが、本稿で提示された枠組みを用いるならば、第二次大戦以降、より複雑な社会的変化のなかで、総合的に「都市の美学」が構築された可能性を理論的に示唆することが可能となった。本稿においては、実証的な論証はなされなかったゆえに、結論的知見として提示されたのは、ある種、実証的研究の前段階としての可能性の提示にとどまってはいるものの、最終的により多様な現実への射程が向けられるようになったことは、ハーヴェイを離れ、いくつかの社会学的・地理学的知見を縁由して「都市の美学」化を検討した、本稿の達成の一つとして位置づけ可能であろう。

第二の問いに関しては、「生産」領域におけるスペクタクルとしての審美性に加えて、「経験」におけるメディアの均質性とオルタナティブの審美性、「権力」においては、視覚的秩序のための審美性が、本稿の考察をへて結論的知見として提示された。この点についても、ハーヴェイの知見では認識できなかった、「都市の美学」の多様な位相が明らかになったと考える。第5章で検討した、創造都市の位置づけは、本稿でのパースペクティブの達成をしめす試金石であった。先行研究においては、ハーヴェイ流の経済的側面からの説明が主流であったが、本文中指摘したように、そこにはアイデンティティに収斂する動向が確認された。創造都市におけるアイデンティティの収斂も、経済における差異化の戦略だ

けでなく、暴力と不安をめぐる権力の秩序形成、資本の流通やメディア・コミュニケーションの作り上げる均一化のモメントなど、多様な社会的経路のなかでの帰結である。

参考文献

Castells, Manuel, 1983, *The City and Grassroots: A Cross-Cultural Theory of Urban Social Movements*, Berkley and Los Angeles: University of California Press. (=1997, 石川淳志・吉原直樹・橋本和孝訳『都市とグラスルーツ』法政大学出版局.)

——, [1996] 2000, *The Rise of the Network Society* (2nd ed.), Oxford: Blackwell.

——, [1997] 2004, *The Power of Identity* (2nd ed.), Oxford: Blackwell.

——, [1998] 2000 *End of Millennium* (2nd ed.), Oxford: Blackwell.

Clark, Terry Nichols, 2004, *The City as an Entertainment Machine*, Oxford: Elsevier.

Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et Punir: Naissance de la prison*, Paris: Gallimard. (=1977, 田村俶訳『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社.)

Harvey David, 1989, "From Managerialism to Entrepreneurialism: the Transformation in Urban Governance in Late Capitalism", *Geografiska Annaler Series B Human Geography*, 71 (1) : 3-17. (=1997, 廣松悟訳「都市管理社主義から都市企業家主義へ —— 後期資本主義における都市統治の変容」『空間・社会・地理思想』2 : 36-53.)

——, 1990, *The Condition of Postmodernity*, Cambridge and Oxford: Blackwell. (=1999, 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』青木書店.)

Sennett, Richard, 1970b, *The Use of Disorder: Personal Identity and City Life*, New York: W. W. Norton. (=1975, 今田高俊訳『無秩序の活用—都市コミュニティの理論』中央公論社)

Zukin, Sharon, 1995, *The Culture of Cities*, Cambridge: Blackwell.

論文審査結果の要旨

本論文は、1970年代以降、欧米諸都市の都市構造再編（urban restructuring）において顕著にみられるようになった、都市空間の審美的要素を強調する「都市の美学」化の動向に照準して、その構造的な要因と多層的な位相を、関連する都市社会学理論の解読をとおして明らかにしたものである。論文は、序章、第１～５章、そして終章からなる。

まず序章では、本論文をつらぬく課題設定とテーマの開示がなされる。そこでは1973年以降の都市空間をめぐる構造転換を「都市の倫理」から「都市の美学」への移行とおさえた上で、「都市の美学」化が「都市と芸術／アート」を中心的な問題構制としていること、そしてそれを「生産」、「経験」、「権力」の三つの鍵概念で説明できることが指摘される。第１章では、序章のテーマ設定を受けて、上述の三つの鍵概念の妥当性がマニュエル・カステルの『都市とグラスルーツ』の解読を通して検討される。続いて第２章では、「都市の美学」化の位相がデヴィッド・ハーヴェイの『ポストモダニティの条件』を主要なテキストとして、経済的な動因に即して、つまりここでいう「生産」に基づいて明らかにされる。第３章では「都市の美学」化の「経験」の領域が、カステルの情報社会論の検討を通して詳らかにされるが、その際、情報化に抗うオルタナティヴな空間の内実／機制を浮き彫りにすることが要となることが確認される。第４章では、「都市の美学」化が「都市空間の管理化」と共振するものであること、す

なわち「都市の美学」化の権力作用が、フーコー、セネットらの知見を援用しながら、横浜市の都市再生事業をフィールドとしながら説き明かされる。さて第5章では、以上の展開を踏まえて、「都市の美学」における「生産」、「経験」、「権力」の収斂の地平が、文化的活動の推進を主軸とする都市再生手法として近年脚光を浴びている「創造都市」の言論状況の理論的整序を通して考究される。そして終章では、「生産」におけるスペクタクルとしての審美性、「経験」におけるメディアの均質性、さらに「権力」における視覚的秩序のための審美性を節合することで「都市の美学」の今日的位相を浮き彫りにすることができる、と主張される。同時に、この主張が具体的な経験場（創造都市）での周到な観察に基づいて、多様な社会的経路のなかで検証されるべきであることが残された課題として提起される。

本論文は、今日、先進社会で多系的な展開をみせている都市構造再編の動向を、「都市と芸術／アート」を理論的フレームワークとして、創造都市の裡に観取される審美的要素に照準して明らかにしたものである。都市構造再編については、これまでどちらかというと経済的側面から論じられることが多かった。それに対して、本論文では、「都市の美学」の多様な位相に光をあてることによって都市構造再編の可能性を浮き彫りにすることに成功している。しかもそこには、著者の柔軟なテキストクリティークの成果が生かされている。よって本論文提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。